

湯屋橋

湯屋橋は 17 世紀初頭、ドラマにあふれた世の中および政局不安定な時代の終わりに建てられた。16 世紀最後の数十年間は、戦争の影が圓教寺を混乱に陥れた。湯屋橋は今日、寺院の再建の象徴として存在している。

15 世紀後半までに、圓教寺は多くの特徴的な建物と大きな経済力を有した複合施設に成長した。しかし、この寺院は戦国時代（1467～1603 年）に急激な衰退を迎えた。戦国時代にはさまざまな勢力が突然の権力の空白を埋めるために戦ったため、広範な軍事紛争が勃発した。1578 年、武将の豊臣秀吉（1537-1598; 当時は羽柴秀吉）が圓教寺に入り、占領し、寺院の複合施設を山の要塞に変え、秀吉軍の約 2 万人の兵隊を配置した。この間、兵士たちは僧侶たちを恐怖に陥れ、建物や仏教遺物を破壊した。

圓教寺の運命は、本多忠政（1575-1631）が姫路城の新城主となったときから上向き始めた。忠政は荒廃した寺院の状態に衝撃を受け、以前の栄光を取り戻すために資金を募った。湯屋橋はこの復興期に建てられた。それから 3 世紀後の 1944 年に、元の青銅の擬宝珠は戦時供出された。1955 年には、新しい擬宝珠が本多忠政を称える碑文を刻んで鑄造された。